

## 産業革命期の尾西機業地域

川崎敏

## 一 はし が き

筆者はかつて幕末より明治初期における尾西機業地域について発表<sup>(1)</sup>したが、その続編として明治時代の尾西機業地域について発表したい。明治時代は日本に近代産業革命の波がおしよせて来た時代であるが、尾西機業もその影響を受け混乱と新しい秩序が生れた。織機の革命・外国綿糸や綿花の輸入・国産機械綿糸の導入は江戸時代から継続してきた生産組織を根本的に改革し、地域的変革もたらされた。現在尾西機業が毛織物の生産地としての形態をとるに至ったのは、大正時代であるが、明治時代はそれに移行する時代として、また現在の機業地域の基盤を形成したという点において意義が深い。本文は明治時代を尾西機業の産業革命期として述べる。それにはこの時代の若干の資料を観察して、この時代の機業地域を考察してみたい。そして史的要因が如何に現在の尾西機業地域の形成に大きな役割をもっているかを述べてみたい。

## 二、資料の吟味

(1) 明治初年の渡辺礼助の資料<sup>(2)</sup>——渡辺礼助（現在の尾西市三条）が名古屋の伊藤豊七等と興益組をつくった時の

資料である。彼が国産奨励及び婦女授産の趣旨をもって、県より資金の貸付をうけ、明治十一年に名古屋に工場をつくるための参考として、中島郡・丹羽郡・葉栗郡の三郡にわたって織屋・織機台数・生産高・生産品種などを村別に調査した。この調査は『その頃の調査』とあるが、明治十一年前後のものと思われる。これによって機業地域を考察してみると、中島郡四八カ村・丹羽郡二三カ村・葉栗郡二七カ村に及んでいるが、木曾川沿岸に沿った町村に高い密度をもった地域がみられる。また一宮を中心としたところにも次の集団があつて、東部と西部にゆくに従つて少なくなる。海部郡は不明であるが、これは織屋が少なかったので、調査しなかつたのか、調査した資料が現存しないのかわからない。

第一表は市町村合併前における旧町村の一宮・奥・起・西成・丹陽地区のみ、筆者が整理して掲載したのであるが、これによつて当時の機業地域の一端を知ることが出来る。このようにして渡辺礼助が調べた九八の集落（現在の大字・小字に当るもの）についてみると四〇戸以上織屋のある村が五、二〇～三九戸の村が四ある。第一表中には奥村、東奥、小信が前者に属し、一宮・時之島が後者に属している。このグループが当時の機業核心地域であつた。もっとも其の集落の全戸数が不明であるから、その全戸数に対する比率を求めることが出来ない。次に織機台数についてみると、奥村が一、一〇二、小信一、一四〇を示し最高である。当時は出機形式によるものが、ほとんどであつたから必ずしも村内の織機を使用したとは限らないが、おもな八集落の織機台数を織屋数で除してみると、奥村一二・一、小信二三・三、起一三・〇、一宮八・三、刈安賀新田二一・二、西萩原一八・七、黒田一〇・四、玉ノ井七・一となり、織屋一戸に対し二〇台以上の集落が二、一〇台以上が四となつてゐる。

生産高についてみると一万円以上の生産をあげている集落が一宮・奥村・東奥・小信・起・刈安賀新田・中島・黒

表 1 明治初年における一宮・奥・起・西成・丹陽の機業

			戸数	桁数	生産高	品名
一宮	一	宮色	36	298	18,168円	ABEF
		色	10	49	7,815	ACH
奥	奥東	村奥	91	1,102	72,348	ABCD
		奥	43	182	12,485	AE
起	小	信	48	1,140	51,149	ADE
		起	13	169	20,681	AEG
	小	信 中 島	12	108	2,712	A
		富 田	9	119	3,543	AE
	東	五 城	6	16	910	A
		五 城	5	22	1,315	A
	西	板 倉	3	15	1,445	AC
		今 村	2	15	480	A
	小	原	1	10	531	A
		宮 田	2	6	250	A
	刈	新 安	14	298	28,625	AC
下 起		1	15	8,398	ABCH	
西成	下	奈 海 良	4	36	900	A
		大 海 道	17	138	7,744	AF
	時	之 島	22	89	4,332	A
		瀬 部	9	41	1,061	A
	大	夙 野	4	35	1,344	A
		赤 見	2	10	378	A
丹陽	吾多	鬘 木	3	10	250	A
		猿 道	2	10	350	A
	猿 海	2	7	200	A	

尾西織物史の資料より作成した。明治10~12年ごろ渡辺礼助が中島・丹羽・栗原の3郡にわたって調査したものを旧町村名によって整理し、そのうちから一宮・奥・起・西成・丹陽村の核心地域のみ掲載した。

A結城織、Bフランネル、C小倉織、D洋手拭、E帯、F棧留、G綾木綿、H紋羽

田で、五、〇〇〇円以上が一色・下起・西萩原・野府・宮地花池・下祖父江・山崎・赤池・北方・大野・西海道となっている。織物品種は大部分が結城縞で九八の集落のうち九七が結城縞を製織している。またフランネルは五、小倉織は一〇、洋手拭は二、帯地一二、棧留織三、綾木綿一、紋羽五であるが一宮・奥村・小信・起・下起・富田方は三種類以上の織物を生産している。一宮の如きは結城縞、フランネル、小倉織、洋手拭、起は結城縞、帯地、綾木綿が生産されているが、この地域が技術的にもすぐれ、進歩的な多種類の品種を製織していた。また注目すべきは養蚕地域に接近した葉栗・浅井地区には帯地、玉ノ井・里小牧などの北部地区、玉野・阿古井・仲野・野府の中央地区には小倉織の製織が行なわれて、地域的分化を生じていることである。

なお九八村の織屋総数を調べてみると一、七四〇、織機台数八、六五二、生産高は結城縞四三三、八八四反、綾木綿三、四二〇反、フランネル五三、四七五ヤール、小倉織二一〇、四八六ヤール、紋羽五六、二一〇ヤール、洋手拭三、八二四ダース、帯地一八二、四二二筋となっている。

(2) 明治二八年の尾参宝鑑の資料<sup>⑨</sup>——この資料を検討してみると、中島郡二〇、葉栗郡一工場が記され、三条村(現在一宮市と尾西市)と三輪村(一宮市)には労働者三〇〇人以上の工場が夫々一工場でき、更に神戸村(一宮市)三条村・起町(尾西市)には一〇〇〜二〇〇人の工場ができてゐる。しかしこれ等の労働者全員が内機によつたものか、出機の農村賃織を含んでいるか明らかでない。女に対し男の労働者の多いところをみると、出機が盛大におこなわれていたと思われる。尾西地方にボタン機が取り入れられたのは明治二四年であるから、尾参宝鑑の編集した二八年には、能率的なボタン機が普及し、内機による生産も盛大化したであろうが、当時は圧倒的に農村賃織が展開していたから、必ずこれを利用して生産の向上を計つたであろう。丁度この頃は日清戦争による好景氣が訪れた時でも

表 2 明治28年の大型織物工場

工場	製造品目	住所	創業年	労働者数		
				男	女	計
A	織物	一宮町	明治20	20	60	80
B	〃	〃	21	15	45	60
C	綿織物	牧川村	22	—	32	32
D	羽二重織	牧神村	24	8	100	108
E	佐織	六輪村	?	5	30	35
F	結城織	三條村	12	5	20	25
G	〃	〃	18	6	35	41
H	〃	〃	10	15	80	95
I	〃	〃	23	6	25	31
J	〃	〃	10	10	35	45
K	〃	〃	7	15	55	70
L	〃	〃	文政2	35	65	100
M	〃	〃	明治22	95	280	375
N	絹綿交織	起町	27	25	125	150
O	〃	〃	26	27	155	182
P	〃	奥町	弘化2	23	58	81
Q	〃	〃	嘉永元	28	53	81
R	〃	三輪村	明治20	—	300	300
S	紺木綿	丸甲村	19	20	40	60
T	縞木綿	日光村	23	5	40	45
U	織物	*大田島村	22	20	70	90

尾参宝鑑（明治30年発行）より作成した。\*は葉栗郡，其他は中島郡で丹羽郡と海東郡，海西郡はない。昭和12年の旧市町村名によって調べてみると，牧川村と丸甲村は祖父江町，神戸村は今伊勢町，六輪村は平和村，三輪村と日光村は大和村，三條村は起町，一宮町は一宮市である。

表 3 明治28年の郡別織物生産高 (単位：1000)

	綿織物		絹綿交織物		絹織物	
	数量	価額	数量	価額	数量	価額
中島郡	1,398	1,092	1,144	1,712	—	—
葉栗郡	198	122	177	214	3	20
丹羽郡	148	75	5	4	3	5
海東郡	861	448	5	4	—	—
海西郡	18	16	—	—	—	—

尾参宝鑑（明治30年）より整理作成した。数量の中島郡と葉栗郡の上欄は単位1000反，下欄は1000本，価額は1000円。1000未満は四捨五入した。

あり、上から育成された機械制の大紡績工場が完成し、紡績業における資本主義が確立した時代であるので、尾西機業地域にも大型工場が浸潤し始めた。すなわちこの頃から尾西機業にも産業革命の波がおしよせてきたので、その中に巻き込まれた零細の織屋の中には、つぶれるものが出来たり、生き残ったものは大規模化するか、零細経営のまま手のこんだ絹綿交織の縞物を多種類つくって、大工場の間隙をぬって行かなければならなかった。そして親織と子織の關係もこの頃から組織的に生じてきたようである。創業年度をみても明治二〇年代が多い。尾參宝鑑の資料は日本の企業が資本主義化してゆく過程をよく物語っている。

第二表をみると一宮町の周辺、特に三条村に大型工場が多くできたことも注目される。東海道本線が一宮に通じたのは、明治一九年六月であるが、このころから江戸時代に機業の中心であった木曾川沿岸から漸次、一宮地方へ移動してきた。特に一宮と木曾川沿岸の中間地帯が機業の集積を大にしている。

(3)実綿・藍・桑の作付面積の資料——愛知県統計書や愛知県毛織物史<sup>(4)</sup>によって、尾張の七郡の明治二九年と三八年のものと、丹羽郡の明治二〇年から四五年度までのものと、中島郡の明治一七年から四五年度までのものを考察すると、実綿・藍・桑の作付面積の変容がわかる。実綿と藍作は年々減少しているが、特に実綿が急激に減少を示している。これは開港後間もなく尾西地方に洋糸(外国綿糸)が出廻ってきたからである。明治五年ごろ起や奥村に洋糸を応用した新規織物を製織するものが現れている。明治一八年一宮三八市における綿糸取引額を調べてみると地糸は四五、〇〇〇貫(一〇万円)に対し、洋糸は五、一〇〇俵(六五万円)であるから、すでにこの頃における洋糸の浸潤は甚だしく、地糸は年々圧迫されてきた。これが綿の栽培を減少させ、農家の副業として広汎にわたって行なわれてきた綿糸製造を衰退させ、質織がそれに置換えられた。

表 4 実綿・藍・桑の作付面積の変容

(A) 尾張平野

	実綿		藍		桑	
	明治29	38	29	38	29	38
中島郡	100.0町	6.6町	964.6町	183.8町	432.4町	522.0町
葉栗郡	25.4	2.4	64.0	5.5	164.7	224.0
丹羽郡	107.4	5.9	324.8	22.8	611.0	1032.1
東春日井郡	17.4	8.3	46.7	14.5	438.7	647.8
西春日井郡	105.8	1.0	213.3	12.7	279.5	158.8
海東郡	162.1	10.5	336.9	52.8	156.8	116.7
海西郡	11.2	4.5	190.9	13.8	91.6	47.4

(B) 丹羽郡

	実綿	藍	桑
	町	町	町
明治20	650.0	300.1	858.9
25	213.5	603.6	800.5
40	2.2	36.5	1519.3
43	0.2	21.5	1612.7
45	—	1.5	1829.6

(C) 中島郡

	畑面積	実綿	藍	桑
	町	町	町	町
明治17	4193.1	1064.7	743.4	7.8
20	4339.1	1094.8	849.6	—
25	4400.5	352.4	985.8	269.1
40	4358.1	13.0	145.5	613.6
45	4343.2	1.2	60.3	716.9

愛知県統計書より作成した。ただし (B) は愛知県毛織物史 (玉城章) より抜萃して整理作成した。

ところが此の頃、洋糸の圧迫だけでなく殖産興業の政策によって、大紡績会社の製造する国産機械綿糸の影響も現れてきた。なかでも明治一六年に設立された一〇、五〇〇鍾をもつ大阪紡績会社が、まず火ぶたを切っている。これが更に綿作の減退に拍車をかけている。これに対し藍作はその減退がややおくれいているが、これは外国染料の出廻りが、綿糸よりもややおくれいているためである。それに外国染料は使用方法が困難で褪色したり、布地を損じたりしたので、染色技術の進歩するまでは、地元の藍が使用されていたのである。明治一四年愛知県では香川県より阿波藍栽培の技師を招いて、巡回講演と実地指導をなし、藍作改良伝習会を開いているほど、明治の初年には藍作を奨励している。しかしこれも二五年ごろをピークとして減少の一途をたどるようになった。中島郡は尾張地方

表 5 西大海道村（現在一宮市）主要織屋一覽表

		明治7年	15年	20年代	30年代	42年	45年
谷 小兵衛	A	農・織屋	綿製造業	織物	岡木綿 出機	綿物 足踏 12台	結城 7,059反 男女 0人 5人
	B	—	—	—	—	—	—
	C	—	—	24 100 年人	—	—	—
谷 林右衛門	A	農・織屋	綿製造業	岡木綿 50軒 出機	—	綿織物 2,000反 男女 0人 5人	結城 12,000反 1人 18人
	B	—	—	—	—	—	—
	C	—	—	—	—	—	—
長谷部 雄健	A	農	魚油小売	岡木綿 出機	岡木綿 後半よ 出機か 内機	綿織物 9,500反 男女 0人 17人	結城 23,000反 1人 30人
	B	—	—	—	—	—	—
	C	—	—	—	—	—	—
谷 孫助	A	農	18年織屋	岡木綿 出機	岡木綿 250軒 300出 出機	綿織物 足踏 5,888反 男女 6人 0人 9人	— 9,222反
	B	—	—	—	—	—	—
	C	—	—	—	—	—	—

A職業・製品, B織機台数・生産数量, C労働者数。寄生地主制論（塩沢君夫・川浦康次）より抜萃し、整理作成した。

で最も藍作を行っていたところであるが、二五年の九八六町歩を最高として、四五年には六〇町歩に減少している。丹羽郡も同様に二五年が六〇三町歩、四五年が一・五町歩と甚だしい変化を示している。

綿作と藍作の減少に対して、桑の栽培が盛んになってきた。中島郡においては明治一七年には僅か七・八町歩であったが、四五年には七・七町歩、丹羽郡は明治二〇年に八五九町歩、四五年には一八八〇町歩と増加している。これは、尾北地方の犬山扇状地の末端部に機械による生糸の製造が始まり、これが年々向上の一途をたどっているためである。

(4) 西大海道村の主要織屋一覽表の



資料⑨——西大海道村は一宮市街の中心部から五キロ東北にある農村で、現在は一宮市域に属している。この資料を吟味してみると、織屋の成立過程と一宮付近における機業地域形成の過程を知ることが出来る。まず谷小兵衛家はすでに明治七年に農と織屋を営み、二四年には労働者一〇〇人を使用するようになっていたが、おそらく内機と出機を兼ねていたのであろう。この一〇〇人の労働者は出機による賃織が主であったと思われる。表には三〇年代に出機と記してあるが、それ以前においても出機を営んでいたに違いない。むしろ出機中心であったであろう。四五年には労働者男二人、女二人となっているが、この人数が内機による労働者である。それでも、完全に内機経営になったのではなく依然として出機経営をすてていない。それは生産高をみると月平均約六〇〇反の生産であるから、女工一二人では一人平均五〇反の生産となるので、とうてい一二人の女工においては生産不能である。当家は更に大正七年には男四人、女三七人の雇用労働者をもち足踏機一〇〇台を設備して、絹綿交織物を二二、三〇〇反生産している。足踏機は一人一台の操作であるから、三七人の女工では一〇〇台を操作するとは不可能である。やはり出機経営をすてなかったことが明らかである。大正九年には豊田二巾力織機（鉄製）を五〇台、大正一〇年には二二〇台と増加して飛躍的な発展をしている。しかし此のように順調に伸びてきた織屋であるにもかかわらず、大正一一年に廃業しているところを見ると、大戦後の恐慌の影響をうけ没落したと思われる。

谷林右衛門家は二〇年代には五〇軒の出機をもち、四二年から内機と出機を併用してきた。大正二年は男七人、女二〇人を雇用して一二、〇〇〇反の生産をあげている。これも労働者数と生産高からみて出機生産が含まれているとみてよい。大正八年には豊田二巾動力織機（鉄製）を採用して発展しているが、大正一二年に廃業した。当人も大戦後の恐慌の波に乗っている。両谷家は明治・大正初期の尾西の織屋が歩んだ道をよく示している。かつては商品生産

の先頭に立って、めざましい発展をしているが、恐慌に直面するともろくも倒産している。

これに対し長谷部雄健家は明治初年には農と小売商であったが、明治二八年から出機を始め三〇年に内機をとり入れ、四五年には男一人、女三〇人を雇うして二三、〇〇〇反を生産し、大正二年には足踏機四五台を設備している。そしてよく大戦後の不況を乗り越えて現在も営業をつづけている。谷孫助も長谷川新左衛門も長谷部雄健家と同じような歩をしているが、明治の初期にはいづれも自作貧農層に属していた。これが織屋稼業によって地主層まで伸びている。このように廃業するもの開業するもの、さまざまの形態によって尾西機業地域は拡散されていったのである。

(5) 明治末期の県統計資料——第六・七表は明治四一年の統計資料から抜萃して整理作成したものであるが、この資料について明治末期の尾西地方の機業地域を考察してみると、機業戸数の分布は中島郡六、四三九（うち賃織が八三％）葉栗郡二、七四〇（七九％）海東郡三、三五四（七七％）海西郡一一七七（九八％）丹羽郡四二二〇（八六％）東春日井郡一、一五〇（九八％）西春日井郡二二九（九七％）であるが、賃織が七七―九八％も含まれているから、織屋と称せられるものは中島郡一、〇七八、葉栗郡五五四、海東郡八五四、海西郡二七、丹羽郡五七七、東春日井郡一三、西春日井郡六となる。この中には工場・家内工業・織元が含まれているが、地域によってこの組み合わせが異っている。中島郡は工場が一％、家内工業五三％、織物元三六％、葉栗郡四％、七七％、一九％、海東郡二％、八一％、一七％、海西郡一五％、七〇％、一五％、丹羽郡八％、一五％、七七％、東春日井郡八％、八％、八四％、西春日井郡三三％、〇％、六七％なっている。すなわち中島郡は三者とも比較的多く、海西郡は工場と家内工業が多く、葉栗郡・海東郡は家内工業が極めて多く、丹羽郡は織元が多い。東春日井郡・西春日井郡は織屋の数が極めて少ないが織元の

表 6 明治41年の機業戸数、織機数、労働者数

	機業戸数						織機数		労働者数	
	工場	家業	内業	織元	賃織	計	力織機	手織機	男	女
中島郡	122	576	380	5,361	6,439	94	10,256	503	4,237	
葉栗郡	22	429	103	2,186	2,740	55	4,519	331	10,394	
海東郡	14	700	140	2,500	3,354	—	6,524	4	3,254	
海西郡	4	19	4	1,150	1,177	90	2,621	50	1,357	
丹羽郡	47	84	446	3,643	4,220	1,098	9,837	181	5,301	
東春日井郡	1	1	11	1,137	1,150	10	2,531	3	1,158	
西春日井郡	2	—	4	223	229	63	535	5	236	

愛知県統計書より作成した。中島郡の中に一宮市を含む。綿白布の製織を主とした丹羽郡に力織機の浸潤が多いこと。農村賃織が盛大であったこと、織機をほとんど有しない織元と称する織屋が多かったことなど注目される。

表 7 明治41年の織物生産価額

(単位：1000円)

	綿織物	絹織物	絹交織物	機械織 広巾白 綿布類	綿毛布	毛織物 及その 交織物	其 他	計
中島郡	3,121	8	2,776	—	2	160(8%)	—	6,067
葉栗郡	358	188	220	—	—	75(9)	—	841
海東郡	407	—	—	—	—	135(25)	106	542
海西郡	73	—	—	—	—	—	—	73
丹羽郡	1,430	428	38	3	1	7(0.3)	7	1,876
東春日井郡	48	—	—	83	—	—	1	132
西春日井郡	70	—	—	—	—	—	—	70

愛知県統計書より整理作成した。金額は1000円未満は4捨5入。

比率が高い。  
次に織機数を調べてみると中島郡と丹羽郡が一万台を突破し、後者は力織機が甚だ多い。これは綿織物の生産を行っていたためである。また中島郡・丹羽郡は賃織の所有する手織機の数も多く注目すべきであるが、比較的狭い面積をもつ葉栗郡・海東郡も賃織手織機が多い。中島郡・海西郡の織元は織機を所有せずもっぱら賃織に依存していたことは注目される。力織機と手織機を比較してみると、手織機が圧倒的に多く、工場組織をとっていたところも、ほとんど手織機によって織物を生産していた。中島郡について調べてみると一工場平均にして手織機一

九台、力織機〇・七台、葉栗郡は手織機一一台、力織機二・五台となっている。織物品種別にみると中島郡は綿織物と絹綿交織物、葉栗郡、丹羽郡はそれに絹織物が加わり、海東郡・海西郡は綿織物が多く生産されている。また毛織物が僅か浸潤してきたが、特に中島郡と海東郡にその拠点が現れている。これが大正時代のセルジス全盛を極めた中心地になっているのである。特に海東郡は生産価格からみると二五%を示している。

### 三 機業地域の構造

#### (1) 木曾川沿岸から内陸部への拡散と集積

江戸時代の河川交通を主としていた時代は、木曾川沿岸が機業の核心地域であった。それは北部の黒田村（現在木曾川町）中部の奥村（一宮市）起村（尾西市）南部の下祖父江（祖父江町）を頂点とした機業文化扇状地の発生とみられる。<sup>(6)</sup>これらの頂点は美濃地方への渡場に近かったり、木曾川の河港でもあって早くから交通の要地であった。明治初年において一集落に四〇以上の織屋があり、五〇〇台以上の織機を有するものを調べてみると、中島郡においては奥村・小信、葉栗郡においては玉ノ井・黒田である。またこれに次ぐものとしては中島郡では東奥・一ノ宮・中島吉藤・下祖父江・阿古井・刈安加新田・起村・蓮池であり、葉栗郡では北方・島・大野・富塚・里小牧・光明寺・尾関、丹羽郡では時之島・西大海道であるが、一ノ宮・時之島・西大海道を除けば何れも、木曾川より約二キロメートルの距離である。これ等の地域が時代がたつに従って、漸次内陸部へ拡散して行った。特に明治一九年六月一宮駅が開業して名古屋と結ばれ、七月木曾川駅、二〇年一月岐阜駅ができて東海道線が開通するようになると、内陸部への浸潤が顕著に著れてきた。木曾川の水運から東海道線の鉄道へと輸送の動脈が転換するに従って、このような現象は

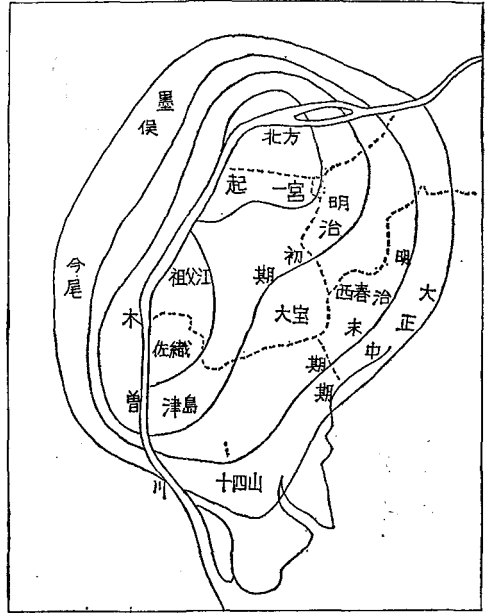


図1 出織地域の拡散

か、出機が混入しているか、それとも出機が主であったか明らかでないが、尾西地方にボタン機（高機）が使用され始めたのは、明治二四年であるから、それ以前の居座機では、内機による大規模化は困難であった。それが明治二四年以後のボタン機使用の時代になると、内機経営が盛んになり、いわゆるマニユ的形態が急増し、やがて工場制工業へ前進していた。しかしマニユ的なものが成立しても、出機は依然として盛大を極め、この出機による生産が尾西機業の大半をになっていた。

明治初年と明治四一年の両資料を比較して機業地域の拡散と集積を調べてみると、中島郡においては機業戸数が五

当然であろうが、工場制工業の成立と共に、それはつきり現れている。

尾参宝鑑によると明治二八年の調査によると、二一のうち創立年度が明治年代のもの（一工場は不明）一七工場のなかで、一一工場が鉄道と関係が深く、内陸部に立地している。そしてこの二一工場のうち半数以上が明治二〇年以後の七年間に創業し、残余が文化年間から明治一九年に及んでいる。しかもこれ等の創業の古い工場も、明治二〇年以後急激に大規模化している。ただ尾参宝鑑の資料は、工場の経営が内機のみによったもの

○三から六、四三九となっている。そして明治四一年は工場一二・家内工業五七六・織元三八〇・賃織五、三六一となっており、約三〇年間に急激な増加を示している。もっとも調査指標が必ずしも同じでないから数値だけでは比較にならないが、工場制工業・マニユ的な家内工業が著しい進展を示していること、工場を有しない織元と賃織組織が網の目のように、この地域を充填していることを知る事が出来る。また中島郡の織機数を調べてみると、明治初年は五、五七九台、四一年には一〇、三五一台で、しかも後者は力織機が九四台含まれている。葉栗郡は明治初年の機業戸数三四四、織機二、四九一台が、四一年には前者が二、七四〇、後者が四、五七四台（力織機五五台含む）、丹羽郡は明治初年は機業戸数九七、織機六一三台が、四一年には前者四、二二〇、後者一〇、九三五台（力織機一、〇九八台を含む）となっている。ここで注目すべきは丹羽郡の数値が飛躍的に伸びたことである。これは地域的に東方内陸部に向って、機業が深く喰い込み、しかも尾西地方の在来からの絹綿交織を主とした手のこんだ縞物に対して、大量生産を目標とした白布中心の綿業地域が形成し始めたことである。また丹羽郡は養蚕地帯をもち、製糸のマニユ的形態が早く成立し、産業革命の進行と共に工場制工業の移行がすみやかであったところであるが、ここにも一宮付近のような拠点が生派している。一方中島、葉栗両郡を中心とした手織による集積の限度が、すでに限界に達し、むしろそれを乗り越すために地域の拡大が必要であり、これが賃織地域の拡大として丹羽郡の中に、はみ出て行つたとみられる。このような現象は両毛地方とよく類似している。明治初年と四一年を比較して織機の増加率をみると、中島郡と葉栗郡は一・八倍であるが、丹羽郡は一七・八倍となっている。

またこの東方地域と同時に海東・海西・東春日井・西春日井郡に向って、賃織地域が拡大している。明治四一年の資料によると海東郡・海西郡の場合は機業戸数が前者が三、三五四、後者が一、一七七、織機が、前者が六五二四台、

後者が六、七—一台（力織機九〇台を含む）、東春日井郡・西春日井郡は機業戸数が前者が一、一五〇、後者が二、二一九、織機が前者が二、五四—台（力織機一〇台を含む）後者が五八〇台（力織機四五台を含む）となっているが、このように東部の畑作地域から南部の水田湿地地帯に向って著しい拡散が行なわれている。そしてこの現象は大正末期に力織機が手織機と交替現象を始めるまで継続しているのである。これ等の周辺地域は賃織が主で、織屋と称される工場・家内工業・織元は比較的少なかった。すなわち織屋に対する賃織の比率を調べてみると核心地域は少なく、中島郡は織屋に対し賃織が四・八倍、葉栗郡は三・九倍、海東郡は二・九倍であるが、丹羽郡は六・三倍、海西郡は四四・二倍、東春日井郡は八七・四倍、西春日井郡は三七・一倍となっている。この数値は織屋の経営規模の大小にもよるが、一般的にみて周辺地域が賃織地域を形成していたとみてよいであろう。核心地域の織屋はこれ等の周辺地域に向って、賃織圏の拡大を計っている。それはすでに述べたように手織時代においては、核心地域の集積が一定の限界を示していたからである。その距離は一日で往復出来る範囲が限界であった。

このようにして機業文化扇状地は拡散と集積をますます大にし、やがて文化扇状部に発達した一宮市と津島市、文化扇端部の江南市をその核心地域として、次の時代の機業地域を形成していった。尾西地方に機業都市が成長したのも、この産業革命期である。そして綿作と繅糸部門を崩壊させた産業革命が、広汎にわたる農村賃織地域を形成させ更にこれが次の力織機時代になると都市集中という様相を示している。

木曾川西岸の美濃地方は尾西地方の賃織地域になったが、独立性を有する機業地としての発達は弱く、ただ笠松・竹鼻（羽島市）地域がやや独立性をもった程度で、尾西地方のような盛大な機業地としての発展はみられなかった。これはこの地方が江戸時代より水害常習地域であり、水田湿地地帯であったため綿作の栽培が不利であり、耕地面積

も広く純農村地域で企業に対する関心が薄弱で、機業地としての基盤が強靱でなかつたためである。また尾西の賃織地域としても木曾川や輪中の各所に点在する大小の河川と湖沼が機動性をもつ賃織には不便であつたので、さほど成長していない。むしろこの輪中地域は尾西機業地帯への労働力供給地であつた。実に木曾川を境界として尾張と美濃の地域性が機業の発達に大きな影響を与え、両者の地域差を一層大ならしめたと考えられる。

## (2) 機業地域の地域性

明治末期における尾西機業地域の東部は犬山市から江南市・岩倉町を結ぶ線上で限界が決定され、南部は海部郡の南端、北部と西部は木曾川を僅か越した線上で決定されている。木曾川町・一宮市・津島市を結ぶ南北の地位層をみると、その機業文化の堆積層が幕末から明治末期までの間に、一宮市およびその周辺に最も高く津島市とその周辺がこれに次いでいる。木曾川沿岸の木曾川町から一宮市に至る地域は古い地位層の上に更に堆積し、一宮市及びその周辺と津島に至る地域は、明治中期から末期に至る堆積が顕著である。また起町（尾西市）・一宮市・古知野町（江南市）を結ぶ東西の地位層をみると、古い起地区の地位層の上に新しい堆積が甚だしく、これが一宮市に連続して古知野町に及んでいる。起・一宮間はほとんど傾斜が認められないが、古知野に向つては急傾斜を示し、不連続線を若干認める。そしてこの堆積は織物の種類と生産の程度、それに織機との関係において地域分割が行なわれ、独特の地域性を形成した。

今これを第三図によつて観察し、地域性を検討すると、葉栗郡は力織機の浸潤が極めて少なく、ほとんど手織で絹及び絹綿交織のような手のこんだ織物を生産しているが、毛織物もかなり浸潤し始めた。これとよく類似しているのが中島郡であるが、すでに述べたように産業革命の波がおしよせて来ると、零細企業を主体とした古い機業地はこ



図2 明治四十一年の織屋

(賃織は除く、単位は一戸)

現在の一宮市から尾西市・木曾川町にかけての集団、東部の江南市を中心とする集団、南部の津島市を中心とする集団が形成されてきた。これをとり巻いて賃織地域がある。明治中期以後における尾張平野の農村地帯は一般に人口の減少を示しているが、織屋の集団地域は著しい急増を示している。それは機業によって、この地域が強い人口吸引力をもつたためである。

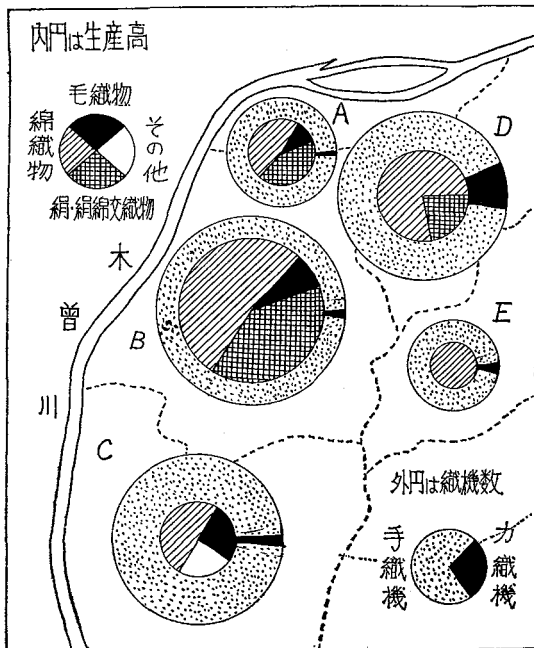
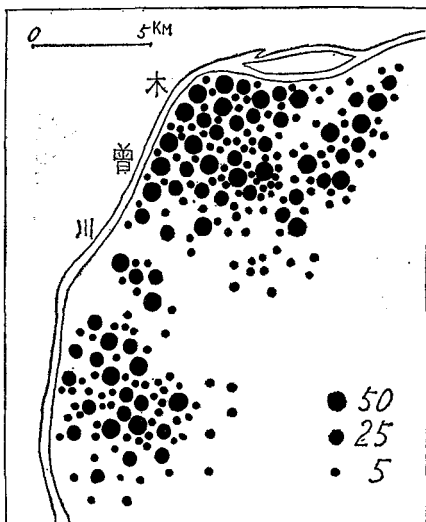


図3 明治四十一年の織物の種類と織機  
内円と外円の関係によって、経営規模の大小、織物種類と織機との関係などから、機業の地域性を知ることができる。  
A 葉栗郡、B 中島郡、C 海部郡 (海東郡・海西郡) D 丹羽郡、E 東春日井郡と西春日井郡。

のような方法をもって大企業の間隙を縫わなければならなかった。幕末の綿織から絹織交織へ、しかも縞物製織という古い技術を生かしながら、手のこんだ織物を生産していたのである。これが現在の毛織物生産の基盤をなしている。これに比して海部郡は綿織物のほかに毛織物を早く取り入れ、明治末期にすでに金額にして四分の一の生産をあげている。そして絹及び絹織交織を生産せず新規織物の生産に乗り出した地域として特色がある。また葉栗郡や中島郡に比して、織機数の割に生産高（金額）が少ないことも特色である。この織機と生産高の関係は丹羽郡や東西春日井郡も同様で、共に類似している。これは葉栗郡や中島郡の古い機業地よりも単純な織物を生産していたこと、葉栗郡や中島郡の織屋の出機が深く喰い込んでいたことなどによるものと思われる。

しかし丹羽郡は生産高の四分の一ぐらい絹及び絹織交織が混入している。これはもちろん葉栗・中島両郡の境界地域で、一宮につづく一連の機業集団のためである。また犬山扇状地の養蚕地帯を背景として生糸との関係が深く、葉栗・中島両郡と共通の基盤をもっているからである。産業革命によって中島郡及びその東南地域の綿作と綴糸部門が破壊されても、養蚕は崩壊せずむしろ盛大を極めていたことが、機業との相関性を持続させた。丹羽郡における力織機の浸潤度は最も高く、手織機に対し一〇%を占め、ここにも産業革命の波がおしよせている。単純な白布綿織を大量に生産し始めたのも、古い機業地に対し性格を異にしている。

尾西機業地域を織物の種類によって地域区分してみると、一宮市及びその周辺から西部と北部の木曾川沿岸にかけて、絹及び絹綿交織と綿織と毛織を混入した地域、東部の古知野町から岩倉町に至る綿織地域、南部の津島市を中心とした綿織と毛織地域に分れる。すなわち一宮市を中心した古い機業地は絹・綿・毛織の多様性に富んだ複雑な織物地域、それをとりにまく周辺地域は綿織を主とした単純な織物地域ということができる。また織機からみるならば

古い機業地は、いつまでも手織機を残存させて、手のこんだ織物を生産する形態を持続させ、周辺地域は産業革命の波に乗って力織機の浸潤を早めて、力織機浸潤地域を形成している。零細企業の集団している古い機業地が、僅かの資本で農村賃織に依存し、大企業の間隙を縫っているのに対し、周辺地域は大資本をもった大型工場が取り巻いている。ここにも産業革命の波動が地域的に異った形態で影響し、異質の機業地域を形成したのである。

#### 四　む　す　び

- (1) 尾西機業は木曾川沿岸に派生し産業革命期には急激に内陸部に向って浸潤していった。それは機業文化扇状地の拡大とみることができる。(2) 機業文化扇状地の扇央及び扇端部に機業の拠点が発達し、そこを中心として更に拡大している。その拠点は一宮市・津島市・古知野町である。(3) 産業革命期における尾西機業の質織地域の限界は東部の犬山市・江南市・岩倉町を結ぶ線上、南部は海部郡の南端、北部と西部は木曾川を僅か越した線上で決定されている。(4) 産業革命によって綿作と綴糸部門は破壊されたが、機業は外綿の輸入と当時盛大を極めた養蚕製糸によって一層隆盛に向った。(5) 機業の経営は零細的のものが多く、これを持続させるためには、手のこんだ絹及び絹綿交織のような織物を生産して、大企業の間隙を縫わなければならなかった。これが古い機業地に絹及び絹綿交織地域を形成している。(6) 古い機業地を取り巻いて比較的大規模の工場が、産業革命の進行と共に創設され、単純な織物地域をつくったが、その中にも零細的のものが付随している。(7) それと同時に古い機業地の中にも大型工場が現れてきた。これは古い地位層の上に新しい地位層が形成されたとみてよい。しかし零細的機業経営の残存性は強く、この形態をもって大正時代の毛織物生産に向った。(8) 明治末期における毛織物の浸潤は葉栗・中島・海部郡に現れたが海

部郡が最も浸潤性が強い。力織機の浸潤は丹羽郡の一〇%を除いて、他郡はほとんど手織機を使用しその普及の度が緩慢であった。(9)尾西機業を育成していた綿作と藍作は明治二〇年ごろから、急激に衰退し、それに代って桑の栽培が盛んになったが、それも丹羽・葉栗・東春日井郡と中島郡の一部に集中する傾向を示し、それが機業と相関性を持っている。(10)尾張平野の東北部は養蚕地域が確立し、それより西南部が機業地域となって地域を分割し、その機

業各地域は一宮市を中心とした綿・絹・絹綿交織・毛織などの混合地域、東西春日井郡と丹羽郡の一部に綿織地域、海部郡の綿・毛織地域となって地域的分業形態が形成された。(11)産業革命の波動は異った形態で、尾西機業地域の各地に影響し、異質の機業地域を生じた。そして次の時代の機業地域の基盤を確立した。

- (1) 拙稿「幕末より明治初期における尾西機業の地域形成」地理学評論三三卷六号、昭和三六年六月
- (2) 森徳一郎「尾西織物史」七七頁―八五頁、昭和一四年四月、原本は渡辺一郎氏所蔵のもの。
- (3) 小菅 廉、伊藤孝之助、笠原久保「尾参宝鑑」一四八頁、明治三〇年一〇月
- (4) 玉城 章「愛知県毛織物史」昭和三三年
- (5) 塩沢君夫、川浦康次「寄生地主制論」昭和三三年(二八八頁の表を筆者が整理作成して使用した)
- (6) 田中啓爾「地理的総合研究」昭和三三年